

長島 中国外交は気を付けたいといけないと思っています。アメリカと首脳会談が終わったから、じゃあ次は中国だという意見も政府の中になくもないですが、ここは慎重になつたほうがいい。急いで首脳会談をする必要はないと、私は思います。

アメリカが今後どういうアプローチをするかトランプ大統領の本心は分からない。来年の11月にはアメリカで中間選挙があり、その近辺でAPECが中国で開かれます。そこまでの長い視点で、米中関係を見極めながら、日米、日中関係を組み立てていくべきです。日中間では解決しなくては行けない問題が山積みです。拘束されている日本人や海産物の輸入の問題とかたくさんあるわけです。これがある程度解決できるめどが立たない限りは、急いで中国との関係を取り繕う必要はないと思います。

—— トランプ氏も朝令暮改。どんな中国外交を展開するのかしっかりと見定めないと……

長島 そうですね。トランプ大統領は、選挙期間中に中国への関税は60%とも言っていたのが、実際は10%になっている。いろいろ考えている

んだと思います。日本が焦って中国外交で動き出してしまつと、米中がぐっと寄って日本がはしこを外される可能性だってあります。

—— 台湾については。

長島 アメリカは台湾支持に傾いているとは思いますが、じつは今回の日米首脳会談では、今までになかった文言が2つ入っていました。

ひとつは台湾海峡の問題で、「力や威圧による一方的な現状変更は許さない」というもの。今までは「力による」だけ。つまり武力をあくからさまに使ってはいけないよと。しかし、今回は威圧、つまり平時においても圧力をかけてはいけないと明記した。G7の声明の中には入っていませんが日米間では初めてです。日米韓の外相会談の共同文書にもこの文言が入っています。

もう一つの文言は、「台湾海峡の平和と安定を維持する重要性を強調し、両岸にとって意味のある形で台湾が国際機関に参加することを支持する」というもの。これは普段から日米が言ってきたことですが、共同文書の中に、しかも首脳会談の共同文書に入るのは初めてです。

また、アメリカの国務省のフアクトシートで「台湾の独立は支持しない」という文言が入っていたのですが、これがなくなりました。さらに中台問題を巡り「強制」されない平和的解決を求める、とも書き換えられました。これは、例えば中国が台湾を取り囲んでおいて台湾が音を上げて平和的に解決というのはダメだということ。他にも考え抜かれた文言が入っています。

日本にしてみればアジアの安定という意味ではアメリカの姿勢は満額と言っているはず。ただ、この国務省のペーパーが、トランプ大統領の頭の中に入り、きちっと実行されるかどうかはもう少し様子を見ないと分かりません。

安全保障と経済は両輪だけどあくまで基盤は安全保障

—— トランプ氏について、安全保障はあまり得意ではないという見方もある。石破首相の二丁目一番地は安全保障。この辺りを日米外交の交渉の道具として使えないか。

長島 もちろん安全保障と経済は両輪だと思えますけど、どっちが基盤

日米同盟関係を強化しながら仲間を増やす

CASという装備品の共同生産プロジェクトが立ち上がっています。これを水平展開、拡大をして、地域の国々との協力をしていけたらいい。

—— 岸田政権はリアリズム外交を目指すとした。アメリカは重要な同盟国だが、中国ともヨーロッパともしたたかに現実的に外交を展開していくと。石破政権はどんな外交方針でいくのか。

長島 私基本はリアリズムだと思っています。今、リアルな安全保障環境は本当に厳しい。例えば日本がアメリカと中国とバランスよく付き合うのが理想ですが、今はそういう状況でもない。私は、米中の冷戦は14年に始まったと思っています。ロシア

がクリミアを併合し、南シナ海に中国が人工島をつくり始めたのが14年。これは戦後の国際秩序を根底からひっくり返す話ですから。そういう構造の中で日本は、「自律」していくべきだと思う。支配や制約を受けずに、自らが動きやすい、自由に動ける状況を自らでつくっていくようにしなければならぬ。そのためには、まず自力をつけること。日米同盟関係を強化しながら、そして仲間を増やすこと。インド、インドネシア、韓国、台湾、オーストラリア、こういう国々です。この前、中央アジアに行ってきましたけど、彼らもロシアと中国に挟まれて大変だと。だから、日本からの支援が来ることを望んでいるんです。そういう自分たちの仲間を増やして、自力をつけて基盤を持つ。仮にアメリカとの関係がギクシャクしそうな場合でも基盤があれば自由になれる。それをつくるのが今後の安全保障では必要でしょう。

石破首相は日米首脳会談へ向かう直前、私に「毅然と話せばいいと思うが、外交はそれでうまくいくかというところではないと思う」と言った。日米関係、さらにはトランプ氏という手強い相手との交渉はそうそう簡単ではないという認識を示したのだ。長島氏は今回の日米首脳会談を成功とか甘い判断ではなく「(野球の)1回を押さえただけ」と表現した。今回は何とか防いだけ。トランプ大統領は次々と何をやってくるか分からない。長島氏は補佐官という立場こそ「動きやすい」と言う。今後もキーマンとして石破外交の戦略を水面下でしたたかに描くその役目が期待される。



記者 鈴木哲夫
ジャーナリスト

サダメツツオ 1958年生まれ。フジテレビ政治部、日本BS放送報道局長などを経てフリー。30年にわたって水田町を取材、豊富な政治家人脈で水田町の人間ドラマを精力的に書く。テレビフジオでコメンテーターとしても活躍。著書に「ブレる日本政治」(ベストセラーズ)、「政治報道のカラクリ」(イーストプレス社)など。

ながしきあきひさ 自由民主党衆議院議員。現在、内閣総理大臣補佐官(国家安全保障等担当)。1962年、神奈川県生まれ。慶應義塾大学法学部(法律学科、政治学科)卒業、同大学院(憲法学)修了。その後、米田ジョーンズ・オブキンス大学(国際関係論、国際経済学)修了。石原伸見公設秘書や東京財団(現:東京財団政策研究所)にて主任研究員を務め2003年初当選。以降、防衛副大臣、衆院安全保障委員長など歴任し、現在8期目。



かと言ったら、安全保障です。安保がガタガタでは経済関係もへちまもないですから。日本はアメリカが信頼できる戦略的なパートナーであることを示し続けることは必要で、このような安全保障面では伸びしろはまだまだあると思っています。